

かみのかえ
上ノ加江：小さな漁村の体験型漁業の取組

高知県漁協上ノ加江支所長 大高明

上ノ加江地区の紹介

- ・高知県の中西部に位置する中土佐町上ノ加江（かみのかえ）地区。
- ・はえ縄漁業や刺網漁業が盛んで、アマダイや鯛、伊勢えびなどが水揚げされる。
- ・かつて日本の太平洋側のブリ三大漁場の一つとして知られ、1日で15,000尾もの水揚げがあった記録が残っている。
- ・しかし最盛期には6,000以上人いた人口も約600人まで減り、それに伴って漁業者も大幅に減少。
- ・高齢化や温暖化、燃料代高騰など様々な要因により漁業を取り巻く環境は厳しくなっている。



漁業体験の概要

上ノ加江では「一日漁師になれる体験」をコンセプトに漁業体験を実施

体験プログラムの流れ

- ① 鰹のわら焼きタタキ作り体験
- ② 乗船体験（カゴ漁や網漁など、季節によって違う漁法を実施）
- ③ 和船体験（昔ながらの木造船で櫓こぎ体験）
- ④ 昼食（その日に獲れた魚介類とお弁当）

所要時間は約3時間。

家族連れ、団体、学校など客層によってプログラム内容や価格が変わる。



漁業体験を始めたきっかけ

漁業体験のはじまりは平成15年

- ・高齢化、後継者不足、燃料代高騰、魚価の低迷など、様々な要因で水揚げが大きく減退。
- ・危機感を覚えている中、高知県の観光推進事業として、中土佐町から漁協に話があった。



漁協の総会で話し合い

- ・漁協の総会で漁業者に相談。
- ・漁港の前の湾を体験専用の漁場として禁漁区に。
- ・反対意見や否定的な意見が多かった。
「こんな不便な田舎に客が来るはずがない」
「漁師のまねごとにお金を払う人はいない」
- ・全国で実施されている体験型観光の実例を挙げて説明。



事業開始

- ・なにもしなければ衰退する一方だと、押し切る形で事業開始。

漁業体験の実績

モニターツアー開始

- ・平成16年2月からモニターツアー開始
(受入れ人数は164人)
- ・プログラムを試行錯誤
「内容が複雑すぎて楽しめない」
「作業時間が長すぎて船に酔ってしまう」などの感想
- ・接客態度にも問題あり
「お客さんを前にしても無言で黙っている」
「相手をしてもらえなかった」などの苦情



大漁旗を掲げてアピール

漁業体験施設「わかしや」落成

- ・平成18年にモニター期間が終わり独立
(受入れ人数約500人)
- ・お客が来るたび漁協に大漁旗を掲げて漁業者にアピール
- ・体験専用の会場がなく漁協の会議室やベランダで実施していた
- ・平成19年に漁業体験施設「わかしや」を建設
- ・「わかしや」ができたことにより最大受入人数が増加
- ・団体客への営業も可能に
- ・この年の受入れ人数は約600人



漁業体験施設「わかしや」

漁業体験の実績

学校向けプランの作成

- ・平成22年は、大河ドラマ効果で約1,300人が参加
- ・翌年はドラマが終わって3分の2まで減少
- ・新たな客層として学校向けの学習プランを作成
- ・パンフレットを学校に配布するが効果なし
- ・「船に乗る＝危険」というイメージがあるのではないか
- ・漁協の職員が学校に直接訪問して営業
- ・営業は県や町の職員に同行してもらう



海の環境学習

コロナ禍

- ・ホテルや旅行会社との連携、外国人の受入れなども開始
- ・平成29年には約1800人まで客足を伸ばしていた
- ・令和2年にコロナ禍
- ・体験参加者が約500人、予約キャンセルが約600人、参加者よりもキャンセルが多い年になる
- ・今年5月に学校への営業を再開
- ・11月の時点で12校が参加
- ・ツアーなどの団体客が戻らない
- ・全体的な客数は以前の3分の1程度と低迷したまま



カニの甲羅洗い

体験漁業の効果

漁業者や地元の反応

- ・体験をはじめた20年前は反対が多かったが、今では無くてはならない漁協の事業と認識している
- ・漁業者からお客さんに積極的に話しかけるようになった
- ・「ここはこう変えたらどうか」といった意見も出してくれるようになった
- ・体験のお客さんの邪魔にならないよう気を遣うようになった
- ・上ノ加江は小学生が20人ぐらいの小さな地区
- ・体験で100人単位の子どもがやってくると、かつての賑わいが戻ったよう
- ・漁業者以外の地元の人たちも「懐かしい」と嬉しそう

学校の反応

- ・学校への営業は今でも毎年春と秋に続けている
- ・漁業体験の認知度が上がり、先生からは「以前別の学校にいる時に参加した」「今の学校でもぜひ行きたい」と言われる
- ・訪問のアポを取る電話の時点で予約がもらえる



カツオのタタキ体験



岸壁からの釣り体験

体験漁業の課題

現状と今後の課題

- ・もともと問題になっていた高齢化と後継者不足が深刻化しスタッフ不足に
- ・20年前に165名いた漁業者も60名まで減少
- ・開始当初からのスタッフが軒並み70代から80代となり引退した
- ・伝統的な技術を引き継ぐ者がいない
- ・開始当初にプログラムにあった漁具づくりはできなくなった
- ・和船の櫓こぎ体験も個人のお客さんの時しかできなくなった
- ・現在はカツオの薫焼きタタキ体験や、岸壁からの釣り体験を実施している
- ・女性部も高齢化で解散
- ・地元の魚を使った豪華な食事の提供や、子どもたちとの料理体験ができなくなった
- ・体験で獲れた魚をその場で食べることは続けている
- ・漁業者以外の地元の人もスタッフに雇っている
- ・人手を確保するための対策をしているが、以前と同じ水準でサービスを提供することが難しくなってきた

終わりに

- ・引退するスタッフは増え続けており、技術の継承など課題は山積みだが、参加者からの「体験に参加してから魚嫌いの子どもが魚を食べるようになった」という感想を聞いたり、10年以上前に家族と参加した小学生が大人になり、今度は友人との旅行で来てくれるなど、嬉しい出来事もたくさんある
- ・時間の経過とともに少しずつ形を変えてきた漁業体験だが、これからもできることを模索しながら漁業者と共にこの事業を続けていく

ご清聴ありがとうございました

